

スコットランド北西部にスカイ(Skye)と名づけられた島がある。別名「霧の島」とも呼ばれ、濃霧に覆われる日が多いらしい。日本の屋久島が「1年に400日、雨が降る」といわれている例にならえば、「1年に400日、霧に包まれている」となるうか。その島にある醸造所が生みだすウイスキーが「タリスカ」である。

なぜそんなことを知ったかといえ、妻のすぐ下の弟が愛飲していたからだ。その弟が昨年の10月7日に亡くなった。前回に引きつづいて亡きひとの話で、恐縮しながら書いてある。2018年1月に喉の異変に気づいた

ときには、すでに食道癌の末期で、患部が広くて手術不能だった。直前のタリスマス。

イブには鶏の唐揚げを食べていたそうだから、病状というのはわからない。「もう飲めないから」と、ダース買いつけてあったタリスカを1本くれた。

生涯、独身だった弟は、50歳くらいで早々とリタイアし、富士山を目前に望む富士吉田市の実家で、母とともに暮らしていた。音楽それも加藤和彦をこよなく愛し、イラストもよくする人間だった。毎日を気ままに過ごしているとはかき思いこんでいたが、人知れぬストレスがあつたのだろう。妻はそれを悔やむ。

連載エッセイ第69回

## 可能性の束を生きる

放射線と抗ガン剤の治療を医師から提案されたが、劇的な延命効果はないとも伝えられ、治療を拒否し、栄養補給のための胃瘻手術のみを受け、実家で、母と同居する時間をこれまでどおりに送った。散歩やミニクーパーを練つてのドライブもした。秋の気配が近づいてきた9月上旬、希望していた緩和病棟に入ったとの連絡がきた。それから、計算されたかのようなほぼ1か月後の早朝、トイレに自力で歩いていく途中で倒れて息絶えた。

亡くなる3日前、妻と病室を訪ねた。鼻からの酸素吸入と喉の苦しさのために、おもに

ホワイトボードでの筆談である。「もらったタリスカはおいしかった」と語りかけると、「ほかのウイスキーより度数が5度高いから旨い」と記しながら、微笑した。

歩きながら絶命した意味を考える。治療拒否の理由は、延命の問題であるよりは、さいごまで自分のコントロールを、薬漬けなどにされるのではなく、自身で行ないたかったからではないか。早いリタイアも、会社の指示によって自身を統御されるのを嫌ったためだった気がする。

食道癌をウイスキーのせいにする意見もある。

なぜ、霧の島のウイスキーを愛好したのか、とも考える。「自身で自分をコントロールしたい」とは、決断したいからではない。ひとは、一瞬ごとに「可能性の束」に向きあい、束のなかから一筋を選び、その一筋がつぎの可能性の束を呼ぶ……。これが本来の生き方だが、どうしても行為がルーティンとなっていく。彼は、可能性の束に包まれていようとした。可能性の束は、刹那ごとにかたちを変え、とどまらない。まさに霧のようにである。

リタイアのあと、イラスト好きの弟を、鈴木デザイン事務所のスタッフに誘ったが、長

鈴木一誌

考のちに断つてきた。デザインは黒白はつきりさせる決断の連続だから、いまに思えば、それこそ賢明な決断だった。彼の一生を

「立派な生き方だ」と言ってくれるひとがいる。わたしの菩提寺の住職からも、なぐさめではなく「ひとつの生き方として認めます」と告げられた。落胆する妻に気分転換させようと、年末から年始にかけてイタリヤ南端部への旅行を計画した。出発当日の12月30日、妻がベッドから起きあがれず、旅はキャンセルとなった。お節料理の用意などない最悪の正月となった。こういう新年もある。

(すぎき・ひとし/ブック・デザイナー、題字デザイナーも筆者)